

<b>Title</b>	長老会神学大学校の終業礼拝
<b>Author(s)</b>	宮本, 悟
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 10-11
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2350">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2350</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 長老会神学大学校の終業礼拝

宮本 悟

2009年11月27日に聖学院大学の韓国における提携校の一つである長老会神学大学校で終業礼拝が行われた。一般的に韓国の大学では、第1学期が3月から6月、第2学期が9月から12月に行われる。しかし、長老会神学大学校では、韓国の他の大学よりも1週間から2週間ほど早く学期が始まり、早く終わる。終業礼拝をもって、長老会神学大学校の学期は終わり、冬休みに入る。私も、その翌日には韓国を離れ、日本に帰国した。

終業礼拝は、韓景職記念礼拝堂で行われ、普段の平日礼拝よりも45分早い10時半に始まり、平日礼拝通り12時に終了した。すなわち、1時間半の礼拝である。韓国では、例外的に長い礼拝であり、私も韓国では初めての経験であった。日本では、1時間以上の礼拝はよくある。私が日本で通っている教会の主日礼拝も10時半に始まり、12時に終わるので、約1時間半の礼拝である。しかし、韓国の教会の主日礼拝は1時間ほどで終わることが多い。私が韓国滞在中に通っていた長老会神学大学校にある広壮教会の主日礼拝は午前9時に始まって1時間程度で終わっていた。また、私は、午前11時からソウル創造ルーテル教会の主日礼拝にも行っていたが、そこも1時間程度で終わった。従って、終業礼拝のような1時間半の礼拝を韓国で経験したことはなかった。

さて、終業礼拝は、「礼拝に際して」、「賛美と告白」、「仲保の時間」、「御言葉の宣布」、「聖餐、聖礼典」、「派遣と委託」の順に行われた。「礼拝に際して」では、前奏やチャイム、礼拝の誓いなどが行われた。「賛美と告白」では、聖約の確信や悔い改め、罪の赦しの確信などがあり、「仲保の時間」は祈りの時間である。「御言葉の宣布」は聖書の奉読と張永日総長による説教、「聖餐、聖礼典」は聖餐式、「派遣と委託」は送別の祈りと後奏などである。

張永日総長による説教は、「愛の余情を離れた人に」と題して、大学を離れる学生たちに対して、

大学を離れても、神の愛から離れてはならないことを戒めたものである。張永日総長は、ユーモアあふれる方で、説教でも冗談を交えて話すことが多い。学生の笑いを誘う説教は、あまり長老会神学大学校では見られないが、張永日総長は例外である。堅苦しくなりがちな礼拝において、張永日総長の説教はむしろ楽しく学ぶことを論しているように思われる。長老会神学大学の礼拝では、学生たちの真剣味もよく伝わってくるが、教官の熱心さもよく伝わってくる。教官も学生も、声大きく一心不乱に賛美歌によって神を賛美する力強い姿には、学ばされるものがある。

終業礼拝の大きな特徴は、聖餐式があることである。韓国の長老会教会で聖餐式が行われるのは稀だそうである。おそらく規模が大きいからであろう。確かに、広壮教会で聖餐式を経験したことはなかった。20名程度しかいないソウル創造ルーテル教会で毎週聖餐式を行っているのとは対照的である。そのため、終業礼拝のように数千人が参加する礼拝で、どのように聖餐式を行うのかは非常に興味深かった。

聖餐式は、使徒信条から始まり、聖餐奏、御言葉、祈り、そして聖餐となった。まず、教授たちが総長からパン（ウェハース）とワインを拝領した。それは大きな器に注がれたワインにパンを浸して食する方式であった。教授たちの聖餐が終わると、次は教授たちが分担してワインが注がれた器か、パンが盛られた器を持ち、学生の所に行って、パンとワインを与えた。それも、ワインにパンを浸して食する方式であった。大人数であるため長時間かかっていた聖餐式は、教授たちの分担によって意外にも15分程度で終わった。カリスからワインを飲む方式でしか聖餐式を経験したことがない私には、新鮮な経験であった。

さて、3ヶ月間の韓国生活において、自分なりに韓国教会の問題点と考えたのは、礼拝での祈りである。終業礼拝だけではなく、平日礼拝や主日

礼拝でも、それはよく感じた。韓国の礼拝における祈りの内容は、しばしば外国のキリスト者を落胆させる。また、海外生活が長い韓国人キリスト者を嘆かせる。韓国の礼拝における祈りは、神を賛美するのではなく、自らの望みを連呼しているだけのことが多い。祈りとは、神への賛美、悔い改めと罪の赦しと考えている者はこれに失望する。これは韓国でも問題とされることがある。海外でキリスト教を学んできた韓国人キリスト者は、この問題をよく指摘する。

私も、全てではないが、長老会神学大学校の平日礼拝における学生達の祈りで、聞くに堪えないものがあることを知っている。特に、神の国ではなく韓国の発展を祈り、キリスト者ではなく朝鮮民族の繁栄を祈る姿は、非常に奇異に感じる。以前に、総長就任式に参列した際にもその祈りを聞いた。その夜に、同じく総長就任式に参列した韓国系米国人の牧師と食事を共にさせて頂いた際、あれはキリスト教の祈りではないと彼が嘆いたことが思い出される。

今回の終業礼拝でも、それは感じた。「仲保の時間」での順番は、代表者による①学校のため、②教会のため、③国家と民族のための祈りであった。最後に全員で主の祈りも行われたが、やはり国家と民族のために祈るのは、どうしても奇異に感じる。祈りは、韓国のキリスト教における大きな問題と思われる。また、悔い改めと罪の赦しが終業礼拝だけで行われたのも問題であろう。しかし、長老会神学大学校でも、それを問題として認識している方々はいるので、いずれ問題が解決していくことを祈ってやまない。

(筆者は、聖学院大学と長老会神学大学校の交換協定に基づいて、2009年8月31日から11月28日まで長老会神学大学校に滞在した)

(みやもと・さとる 聖学院大学総合研究所准教授)